

すら言及されていない。「あとがき」で著者が書いている「多少、オタクと言われながら結核の研究を続けた」という言葉は、研究者がさまざまな領域で孤立して医学史を研究しているため、領域を超えた情報交換をすることが難しい、日本の医学史研究の組織的な問題を象徴している。

このような欠陥はしかし、この書物全体の価値から見たら小さなものである。本書は、日本の結核対策の歴史を研究する者がまず熟読しなければならぬ情報の宝庫として、そして高い水準のリサーチを示した研究書として、これから長きにわたって活用され続けるに違いない。

(鈴木 晃仁)

〔御茶の水書房、東京都文京区本郷五―三〇―二〇、電話〇三―五六八四―〇七五一、二〇〇四年三月二十八日、A五判、三七六頁、定価五四六〇円〕

高島 文一著

『鍼の道——内科医の青春』

著者の父君は岐阜県旧家の生まれ、二十歳過ぎて眼疾を患い、ついに失明したという。止むなく日本最初の京都盲啞院に入つて鍼按の術を学んだ。しばらく母校の助教諭を務めたのち、大正五年鍼を専門として京都市内で開業し、そのすぐれた施術により、門前市をなすほどの盛業をきわめたとい

う。昭和二十九年惜しまれて逝去されたが、著者は大正二年この父のもとで京都市内で生まれている。市内の初音小学校、府立一中、浪速高等学校に学び、昭和十四年三月京都市帝国大学医学部を卒業して医師の道に進んだ。

この間に教えを受けた恩師、共に学んだ同級生、同僚、何らかの交際のあつた人々について、そのフルネームをあげて、なつかしい思い出を語っておられるが、その記憶力のすばらしさには一驚する。これは著者の並々ならぬ知能の他に、常に恩師には敬愛の念で接し、同級生には深い愛情を持って付き合ひ、軍隊や病院における戦友・同僚には親愛の情をもつて尽くしてこられた著者の暖かい心根によるものである。

著者の生涯の進路は、父君の夢であつた「鍼の根柢を医学的に究める」ことにあつたから、それを目指して医学の道に入られたが、時代は決して平坦な道ではなかつた。

おりからの戦争は著者を思わぬ道に踏み込ませることになつた。

内科医局に入った著者はまもなく、おりから設立された傷痍軍人療養所の医官として赴任することになり、さらに応召して軍医見習士官となり、フィリピンに送られ、野戦病院で診療にあたる身となつた。診療に従事する間、自身結核が発病して内地に送還され入院生活を送ることとなつたが、現隊はレイテで全滅して、実に九死に一生を得ることになつたのである。軍医時代の話はこれだけで一編の物語とな

ろう。

戦後又国立療養所の医官に復帰して時代の急変に戸惑ううち、職員組合の委員長を勤めることとなったが、再び結核が発病して静養の止むなきに至った。

ようやく健康が回復した段階で、目覚めてきたのは鍼の道への復帰である。

エピソードとして戦後進駐軍から鍼灸は科学的な根拠なし、医療行為と認めがたしとされ、廃止されかかったとき、京大の名譽教授で当時三重医専の校長であった石川日出鶴丸博士「求心性自律神経二重支配の法則」をもとに理論的根拠を必死に説いて、ついに鍼灸療法が存続した経緯を知り、石川教授の後任である京大生理学教室笹川久吾博士のもとに学んで鍼灸医学の解明に携わるようになった。

著者の経歴の特異な点として、戦後盲学校の教師群には医学担当の教諭を置くべきだとの勧告に沿って、京都府立盲学校教諭として就任したことである。医科大学を出た医師が盲学校の教諭となることは、身分、給与すべてに不利であった。現在では考えられぬ事であるが、著者は父の母校であるし、校長からたつての願いを受けて就任されたという。学校では理療科専攻学生に「症候概論」「治療一般」の教科を教える一方、鍼灸施術を受けにくる患者の適応者の診断にあたる医師としての仕事をこなし、さらに学校医としての役割、又学校保健主事としての活動まで行ったという。

盲学校の教諭であることから、昭和三十七年ハノーバーで

開かれた国際盲青年教育者会議に日本代表として出席することになったが、これには座長として活躍すると共に、終わってドイツ・フランス・イタリー・スイス等の鍼灸専門医を尋ねて、施術の交換をしながら経巡り、ヨーロッパにおける鍼灸事情を視察した経験が語られているが、この経歴などは英語、ドイツ語、フランス語に堪能な著者にして初めて可能な分野であって、他の追隨を許さない経歴と思われる。

著述は、このヨーロッパにおける鍼灸事情の視察報告の項で終わっているが、著者四十八歳までの遍歴が語られている。いわば本書は「鍼の道」を進む九十二歳の著者の人生の前編ともいべきものであつて、副題にもあるように波瀾万丈の青春時代の経歴が語られている。これからいよいよ鍼灸の医学的根拠の研究に入り、「鍼灸医学序説」等数々の名著の発行、明治鍼灸短期大学の開学にとまない、教授兼付属診療所長として勤務した経歴、さちに同校の大学昇格にあたり同学の教授として学生の教育に当たるなど円熟期に入った段階での著者の経歴、さらに医史学会での活躍の数々などは興味津々たるものがある。

それが語られる後編の上梓が待たれるところである。

全編を読み通して見たとき、著者が自身の歩みを語るなかで、その当時の社会状況を折り込みながら、臨場感溢れる書き方をしておられるので、同時代に生を受けたものにとつて、実に身近に感じられ、著者の体験が自らの経験のように身につまされ迫るものがあつて、一気に読み進み巻を措くこ

とが出来ない、読後感の誠にすがすがしい、印象深い一書である。鍼灸研究者はもちろん、医史学研究者だけでなく、同時代人に広く推奨できる好著といえる。

(杉浦 守邦)

本書は鍼灸学界の最高リーダーである著者が九十歳を過ぎ(一九二・大正二年生まれ)四十歳代までの活動期を「青春篇」と一括し「自叙伝」の形式をとって、斯界の歩みを懇切丁寧に「中外日報」に九九年にわたり連載されたものを一書にされたものである。

著者の言を借りれば「私の生涯は鍼に始まり鍼に終わるといつても過言ではない」そして「ほかのものは、それに栄養を与え、成長を促し、修飾したものと考えることができよう」と。中心軸をあくまでも「鍼」であり、方向は一貫しており、「学」の在り方を簡潔に述べておられる。

(目次)

はしがき

第一章 幼稚園・小学校時代

第二章 中学高校時代

第三章 大学時代

第四章 勤務医時代

第五章 軍医時代

第六章 厚生技官時代

第七章 盲学校専任医師時代

第八章 ヨーロッパ出張時代

略年譜

各章を読み進めるに従い、著者の、出しゃばらない、しかも健全で生真面目な性格に裏打ちされた生活意欲と学究の方針が随所にちりばめられていることが沸々と伝わってくる。

御両親の生き方がそのまま受容され、「鍼の道」を一貫された。京都帝國大学医学部において内科医への道を学ばれ、その間体育の錬成に力め(柔道・短艇、軍務に従って南方戦線において死線をのり越え、内地帰隊後も病魔に犯されつつも一意任務を遂行された。これらの記事の行間には、戦前の学校教育、軍隊経験者にとっては筆舌に尽せぬ意味合いが秘められ、また軍部の戦術・戦略の動揺ぶり等が指摘されていることを認識されることであろう。

戦後官舎を出て京都の自宅に移り、家業継承を決意し、父の指導下に鍼術を追究されているが、昭和二五年の鍼灸医療に関する石川日出雄博士の米軍との対応の記事は迫力を以て記されている。以降、盲学校医師時代の詳細な記述は注目されるものであり、日本の盲教育の「原典」として理解されるべきであろう。かねて関係諸氏の「鍼灸人物辞典」とも言えよう。

「ヨーロッパ出張時代」の記事は、出張費に関する蛭川知事(京大名誉教授・経済学博士)の英断について特筆に値するものであることを指摘するとともに、著者の堪能なドイツ語力が活かされて諸学者との交流に成果を上げられたことが「国